

労働時間についての予備ノート

児 嶋 正 男

はじめに

1. 主体的活動, 非主体的活動
2. 必要労働時間, 剰余労働時間
3. 剰余労働時間, 過剰労働時間
4. 労働時間, 自由時間
5. 労働時間の矛盾の止揚

おわりに

はじめに

労働問題の分野のなかで、労働時間の問題はきわめて重要な課題である。しかし従来労働時間については、その重要さに比して注目されることがきわめて少い。わが国における具体的な労働時間施策をみても、未だに1919年のILO第1号条約（8時間労働制）を批准していない有様であり、既に先進諸国では週40時間制が取られている状況に比べて、日本は甚だ立ち遅れている。また最近ILOで取り上げられた看護職員の労働・生活条件に対する姿勢にしてもきわめて消極的である。このように労働時間に対する取り組みは、労使・行政いずれも非積極的であり、これ程に経済発展をとげた国でこんなにも後進的態度がとられるのは、何処かに大きい欠陥があることを示しているともいえる。少くとも経済の発展に伴って培われる文化の育て方に弱点があり人間尊重の基本を欠いているという点については疑われても致し方ない。

時間という概念を設定し、人間らしく生きるための活用を図ることは、まさしく人間の特性であり、労働の基礎の上に立って、自分の時間を自分で管理

できるようになっているか否かは、人間社会の文化成長の尺度である。人間われわれの存在はいかにしても空間と時間を抜きにしては考えることができず、ましてそれぞれの己れ自身が、自らの在り様を捉え、自らの生きざまを定めようとするとき、人はそこで何をするために時を過そうとしているかに答え得なければならない。

労働時間とは、人間生涯の時間において、人が如何に生きるかの根幹をなすものである。その時間を如何に生きるかがその人を定め、またその人がその時間を躬自らのものとしているか否かが、人が自由であるか否か、人びとが自由な社会を作っているか否かを測るものともなる。

すべての自然物と同じく、人もまた物質代謝過程を生命の基礎とするものであるが、人間はそれを単にその身内に内包するだけでなく、人間特有の仕方で外に拡げることとを特質とする。労働は人間を人間として存立せしめる基本過程であり、人間の自然過程であるとともにそれを自らのものとすることによって始めて自己を主人たる人間たらしめうる。労働は人間を人間として発展せしめ、今も発展させ続けるものとしてある。

昔も今も、労働は人間にとって、人間発展の基礎をなすものであることに相違はない。しかし昔も今も、労働が誰にとっても一様に人間発展の基礎をなしているかどうかは甚だ疑わしい。誰がどのような労働に時間を過し、過させられたかを見るとき、そこには労働に生きる喜びをもった人より、はるかに多く労働を苦しみとした人を見ることになる。そしてこのことは、今もなお基本的には変化がなく、あるいはより一層にきびしい状態にある。

人間に特有の労働の問題を、その量的尺度である労働時間に捉えて、労働の質量の解明に迫ることは、全般的労働問題理解の基礎となり、今日われわれが直面する問題解決の一助となるものと考えらる。

そこでわれわれは、労働時間について歴史的追跡から始めたいと考えるのであるが、それに先立って、ここでは労働時間にかかわる若干の仮説概念の考察をしておくこととする。

1. 主体的活動, 非主体的活動

広い意味での労働は、働くことであり、人が精神的にか肉体的にか何かの活動をしていることをいう。その意味で休息の反対であるとされるが、われわれの持つ働くという言葉には、もう一つ、人間としての内なる自分の力を外なる対象に注いで、その対象が活力をもち、人に役立つものにする事の響を強く含んでいる。この意味で働くことは怠けること、遊ぶことの反対物であり、そこで働という字に人遍をつけ、人間の特有の活動を現わした国字を作って当てたことがよくその意味を表わしていると言われる。

労働を広く働くという意味にとらえる限り、働くことは善であり、働くことは人を益し、働きがあることは誇りである。だからわれわれは、生活の中心に働くことを置き、働きいそしむこと、いそしめることを喜びとした。このことはわれわれの心に奥深く根づいている。われわれが人に会っての挨拶の言葉は、「お早ようございます」「おつかれさまです」「おしまいなさいませ」などと、いずれもすべて働くこと、働けることをたたえるか、働くことをねぎらう言葉である。われわれは働くということについて基本的にはそれを喜びとし、厭わしいとの思いを持っていない。われわれは人間生活における労働の基本的特質をより自然に伝え持っているのであろう。もともと人間は、エネルギーに情熱的に対象に働きかけるという特質をもっているのであろうから。

働くことを労としないよう心得なければならぬとするわれわれの生活態度はたしかに人間の美德をよりよく内臓していると考えられる。しかし、それが個々の内心より発した自覚よりの発露として生じているか否かについては、もう一度よりよく吟味してみる必要がある。

働くことが好きで、従って日本人は比類なく勤勉であるとされるが、それは真実そうなのであろうか。

われわれの勤勉性は、実は歴史的に形成された鋳型の中に鋳込まれて、忙しく働く以外のほかの道を知りうるその為の時間さえ得られぬままに、ただ働くことに安逸であることを示しているのかも知れない。一つの型に、きめられた通り朝から晩まで、働きづめに働いていることは実は案外と怠惰によく似てい

る。それは惰性でやれることであるから。¹⁾

とすると、勤勉であるというのは惰性の発現であり、勤勉の美德は、そのように飼い慣らされた結果であって、それぞれの自己の働きとして生じたのではなかったのかも知れない。いふなれば勤勉に働くのは、`貧乏暇なし、'というものの結果であり、それ以外の選択ができなかったことによるといえる。

そう言えば、昔から貧乏暇なしで、朝から晩まで働いている者たちがいる一方には、きれいな着物を着てのんびり楽しそうに一日を過している人等がいた。古来、絹を織る者は絹を着ず、民衆の手で織られた絹を着るのは民衆自身ではなかった。絹を着ての優雅な生活は民衆のあこがれではあったが、自分たちの生活からは遥に遠い、違う星の下での生活として、夢に画いてみるだけのものであった。しかし民衆には夢である、ゆとりある悠々とした生活は、たしかに一方に現実存在していたのである。このことは洋の東西を問わない。

今日われわれが「余暇」と呼んでいる言葉は、英語のleisure、フランス語のloisir からのものであるといわれるが、そのもとはラテン語のオチュームotium という言葉で、この言葉は貴族の活動をさすのに使った言葉であるという。その当時の民衆の活動にはネゴシウムnegotium という言葉が使われたのであり、つまり民衆の暇のない活動の、negotium に対してotium と言ったのだという。²⁾ 今日とは違った在り方であろうが、ともかくも広く働くという意味では貴族も民衆も同じく働いていたことにちがいない。しかし、貴族の働き方と民衆の働き方とはその内容を全く異にしており、それははっきりと区分されていたのである。そこには、自分の意思で自分が主人として行う活動と命ぜられた枠組の中できまった仕事を果す活動があり、そこでのそれぞれの働きは別のものであることが目にも見え、言葉の上でも当然に区別されていたのである。そして、人間の生命保持の直接の資料を生み出すもっとも肝心な生産活動に余念のない在り様は、奇妙にもotiumではなくnegotiumとして否定において

1) 藤田省三、『原初的條件』未来社、1975年、21ページ。

2) ジョルジュ・フリードマン「工業社会における労働と余暇」、『労働協会雑誌』No.156 37ページ。

捉えられていたのであった。

民衆は自らの生命保持のための生産に加えて、自分等を支配する人びとを養うための生産をしなければならず、まさにそのために年中朝から晩まで暇のない忙しい生活を送らねばならないのであった。全時間を自分の意のままに自由に用いる生活ができるのは、一方で全く暇のない生活を送っている人びとのおかげによるものであった。

気ままに使える時間は、気ままを抑えて仕事に励む人びとの生み出した時間にほかならない。このことは農業を中心とした、ほんの一寸古い時代には何処でも具体的に目に見えた。下から上へ、子方から親方へ、為されねばならない無償の奉仕、それが親方の余裕ある暮しを生むのであるが、それは周知のように助（すけ）と呼ばれた。「余暇」は下から助（すけ）られることによって得る支配者の特権であった。民衆が忙しさのなか、自分たちの必要を充す、横の相互の協力は、互いに償い合うものとして、助とは別に結（ゆい）と言われ、今もなおそのしきたりは各所に引き継がれて生き続けている。

ある特定の少数者のみが持ち得た、自分自身が主人である自由な暮しというのは、突然降ってきたように天から授ったものではない。多数の支配される民衆には、生存ぎりぎりの必要分を残して、その他の生産物はすべて支配者に貢納するよう強制する仕組みを人間が作り、それに基いての役割の階級的分割として人間の手によって生じたものである。

労働を広く一般に人間の働き、人間の活動とした場合、それが生きる根源にかかわることとして、人間の自然な本能的なものを感じとるのではあるが、そのような人間活動もよく見れば、大変自由な活動と縛られずくめで暇のない活動とがある。つまり主体的な活動と非主体的な活動に二分せられていて、被支配階級である民衆には、実は生産的な活動が非主体的活動として強制的に割り当てられているのであった。われわれは広い意味での労働・人間活動がまずは階級的に分割されていることを見逃してはならない。

ところで、今日われわれが生きているのは現代の日本という資本主義の国においてである。ここでの労働というのは、生産手段の所有者である資本家に雇

われ賃金を得るために働く賃労働を意味するのが一般である。われわれは労働を賃労働に限定して、そこでの労働時間が如何なる内容をもっているのかを資本主義的生産において問わねばなるまい。

2. 必要労働時間, 剰余労働時間

資本主義社会における生産は、労働者が定められた時間を資本家の下で労働し、労働の対価として賃金を受けとり、そこでの生産物はすべて資本家のものとなる形態をとる。資本主義以前の社会では、農民は、自分の畑で何日間か働き、親方の畑で何日間かを働くか、あるいは年中自分の畑で働くが収穫物の相当の部分を年貢として納めるなどせねばならないから、明らかに自分の必要分以上の生産のために働き、自分が作り出した生産物を必要分のほかは貢納していることが誰の目にもみえる。だから、生産物を労働量すなわち労働時間で測ってみるなら、自分のための生産にあてた労働時間と、余分に貢納のための生産にあてた労働時間ははっきりと計算できる。自分の労働時間が、自分自身のための必要労働時間と貢納のための剰余労働時間の二つから成っていることは一目瞭然である。しかし資本主義の生産では、生産手段は資本家の手もとに置かれているから、そこに出かけて行って、全労働時間を資本家の下で働くことをし、果した労働の対価だとして賃金の支払いを受けている。ここではもう貢納のためのただ働きの労働は何処にも行われていないように見える。

一般商品の売買と同じく、自由な取引きの上に成り立った契約により、労働者は定められた時間を限って労働に従い、その代償として賃金が支払われる。そこには無償の貢納労働が強制されることなく、等価交換の原則が貫かれ、人格の自由と平等のもとに生産が営まれていることが資本主義生産の以前とは異なる特質だとされる。

ところがこの等価交換の形態をとり、外からはそれと見えない内側に、以前と同じように無償の労働が汲み取られるよう包み込まれているのが資本主義生産の肝心の仕組みであり、労働の何程かの部分は労働者に支払われることなく資本に体化していることを証してくれたのはマルクスである。

マルクスは、階級の存在する社会では、支配階級のために被支配階級が自己

の必要以上の生産のため労働しなければならないことから免れ得ないとする。人格自由の資本主義社会もまた、階級社会ということでは例外ではない。

「社会の一部の者が生産手段を独占しているところでは、何所においても労働者は、自由であろうと不自由であろうと、生産手段の所有者のための生活手段を生産するために、自分の自己維持に必要な労働時間のうえに余分な労働時間を追加せねばならぬのであって、そのことは、この所有者がアテネの貴族であるか、エトルリアの神政者であるか、ローマの市民であるか、ノルマンのバロンであるか、アメリカの奴隷所有者であるか、ワラキアのボヤール（封建領主）であるか、近代的ランドロードまたは資本家であるかに係わりない。³⁾」

資本主義的生産においても、労働者は資本家のために余分な労働時間を追加しているという。しかしそれはもはや直接目には見えない。われわれは資本主義的生産における労働時間を労働の内実に即して吟味することをしなければならない。そして、資本主義的生産の労働時間にも、自己維持に必要な労働時間と余分な労働時間がちゃんと組み込まれていることを見抜かねばならない。

資本主義社会での労働者は、資本家に隷属しているわけではないから余分の労働・剰余労働の追加を強制させられることはない。労働者は自由な人間として資本家と雇用契約を結び、契約にもとづいて労働し賃金を支払われる。さてそこでである。賃金は労働の対価としての形をとって支払われるのであるが、実際に労働者が労働して作り出した生産物は資本家のものとなってしまっている。以前の社会とは生産物の分配の順序が逆になっている。しかもそこに交換過程が入っており、したがってまた貨幣が介在してきている。何しろ生産手段すべてが資本家の手もとに在り、労働者が作り出した生産物は残らず資本家のものとなるから、終始労働者の手もとに生産物が残ることはない。労働者は自分が生活してゆくには、支払われた賃金によって、生活に必要なもの総てを、資本家から買い戻さねばならない。賃金はまるで、労働の対価であるように、労働量すなわち労働時間で測られる形態をとり、しかも御丁寧にも後払いされ

3) マルクス『資本論』長谷部文雄訳、青木書店、411ページ。

ているのであるが、その額はようやくにして労働者の最低必要資料を購入しうる額にしかならない。つまり賃金として支払われている労働量は、労働者の必要とする生活手段の生産のために充てた労働量に止まっている。資本家は全生産物を手に入れ、そのうち労働者の必要生活手段分のみを支払い、残りはすべて自分のものとしているのである。

労働者に支払われているのは、労働者がそこに消費した全労働量に対してではなく、労働者の生活維持の必要に費した労働量すなわち労働力再生産のための部分について、さらに言えば労働にではなく労働力に対して支払われているのであった。資本主義生産の労働量すなわち労働時間は、労働者のための必要労働時間と資本家のための剰余労働時間が合体して一体となっているのであった。

われわれは労働時間を考える場合、それが必要労働時間と剰余労働時間から成っていることを明確に理解しておかなければならない。

社会的分業が発展し生産力が増強し、それに伴って生れ来たつてますます分業、生産力を発展させる商品生産というのは、当り前のことだがそれを売って利潤を得ることを生産の第一義とする。もちろん使うに用をなさない商品は買い手もなく売ることもできないから作る意味がない。だから使用価値のないものを作るわけにはゆかないが、商品生産は使用価値のためではなく、利潤を得るための剰余価値を問題にする。資本主義的生産では如何に価値増殖を行うかが生産の第一課題である。労働時間についていえば、剰余労働時間の獲得が問題であり、その限りにおいて必要労働時間がかかわるのである。

必要労働時間は、労働者が、資本家のためにではなく自分自身のために独立して労働するとしても労働せねばならぬ時間であり、資本家の下で働く場合には資本家によって支払われた労働力の価値に対する等価のみを生産する。労働者には何らの価値も形成しないが、「無からの創造の全魅力をもって資本家を惹

きつける剰余価値を形成する⁴⁾」のは、「労働者が必要労働の限界を超えて苦役する労働過程の第二期⁵⁾」の部分である剰余労働時間である。

資本主義的生産の目的は資本の増殖である。剰余価値、利潤の生産であり、剰余労働、剰余労働時間の取得である。

3. 剰余労働時間、過剰労働時間

資本家は剰余労働時間の獲得のために生産活動を行い、当然の結果として、自己の生活手段は勿論、更に加えられて資本と化して膨張してゆく増殖分を得るとともに、そこに主人として自由に行動する時間をも手に入れるのである。

自由というのは、自立した個人が他律されることなく、自己を主体として振る舞いうる主体的独立が基本をなすと考えられるが、その意味での自由は未だ労働者にまでは及ばない。

資本主義社会における労働者の自由というのは、労働力売買の自由であり、生産手段を自己のものとしな⁶⁾い自由であった。だからそこで労働者が労働時間から全く自由になることは、彼の生活の手段を失う自由をも同時にうることになるのであった。であるからこそ、人びとは安定した雇用のもとでよき労働者になるために、早くからすさまじい努力を続けるのである。労働者はそこでは労働力として安定し、所定の労働時間を資本家のために費すことを安定状態としてはじめて生きた労働者としての何程かの生活の欲望を叶え得る。資本が労働力を購入するのは、ほかならぬ剰余労働の入手のためであり、「資本のうえにうちたてられた生産の条件は、労働者がますます多量の剰余労働を生産する

4), 5) マルクス『資本論』長谷部訳, I, 385ページ。

6) 「ここに自由とは、彼は自由な人格として自分の労働力を自分の商品として処分するという、また他方では、彼は売るべき他の商品を有たず、自分の労働力の実現に必要ないっさいの物象から引離されている、自由である、という、二重の意味においてである」

マルクス『資本論』長谷部訳, I, 317~318ページ。

ということにある。⁷⁾」労働者が能率よく働けば働くほど、より少ない必要労働でより多くの剰余労働を生み出す。「剰余労働の発展には剰余人口の発展が相照応する。⁸⁾」ここで剰余人口になった、そしてついで過剰になったということになれば、それは労働に従事することから閉め出され、失業したということになる。労働者が労働に励んだ結果、労働の生産力が上昇し、そのために労働者自身が失業者となるという風な現象が生じるのは、資本主義の生産様式の下においてのみのことである。⁹⁾

生産に必要な労働のための人口、すなわち必要人口にもとづいて、労働しない剰余人口が生じるのは、剰余労働を私する条件のなかにあり、資本主義的生産では資本家によって生み出される。だから剰余人口が直ちに過剰人口となり、失業人口となるのではない。資本には、「高尚な趣味」「優雅な奢侈」も必要であれば、民衆を引きつける「きらびやかなまがい品」も要る、さらにまたその支配の維持強化のための「防衛」や「開発」も怠ることはできない。ほかならぬ資本にかかえられている以上、それが「無為徒食の剰余人口」であっても過剰人口とはならない。過剰人口となって必要からはみ出すか否かは、資本が必要とするか否かであり、かかって資本によってきめられることである。マルクスはこのことについてつぎのようにいう。

「労働力能がその必要労働を遂行することができるのは、その剰余労働が資本にとって価値をもち、資本にとって価値増殖可能であるばあいだけである。だからこのような価値増殖可能性があれこれの制限によってきまたげられるばあいには、労働力能それ自身は、1) それの実存を再生産する諸条件の外部に現れる。労働力能はそれの実存条件をもたないで実現し、したがってまったくのやっかいもの、充足させる術をもたないままの欲望である。2) 必要労働が過剰なものとして現れる、というのは過剰な労働は必要でないからである。必要労働は、資本の価値増殖にとっての条件であるかぎりだけで、必要なのである。¹⁰⁾」

7), 8) マルクス・高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』大月書店, 546ページ、。

9) マルクス『経済学批判要綱』, 547ページ。

10) マルクス『経済学批判要綱』, 552ページ。

こうして資本のもとでの生産力の発展は、必要労働を剰余労働に対置する部分として求め、剰余労働に対して必要労働の部分を減少させることにある。以前必要とした剰余労働量をなしとげるのに、より少ない労働力能をあてることを進める。そして労働力の一部を過剰としてゆく。

ところで、資本は剰余労働を獲得し、それを資本として拡大再生産することにより増強するものであるから、過剰とした労働力を単に過剰に放置しているばかりでなく、それを吸収する性質をも持っている。剰余価値はそれを転じて資本として生かされるためには、現に資本に充用されている労働力以外の労働力、すなわち過剰人口の労働力を必要とする。だが剰余価値が資本として用いられるためには、それを生産手段として活用しうる最低の条件が備わらねばならない。したがってその条件が空間的・時間的に整うまでは過剰人口は過剰のままに存在することになる。そしてしかも、過剰人口が資本と結合されて、追加資本として活動することは、資本の剰余価値を求める運動を行うことにほかならないから、そこでもまた過剰人口の創出が行われることとなる。

資本主義的生産における生産力の発展は社会が必要とする総生産を行うための生産手段の強化・労働時間の一般的減少の方向には進まない。労働力は絶えず部分的に過剰とされて待機させられる。

われわれは、資本の高度成長のおかげになる豊かな浪費材に恵まれ、一方必要とする健全な食品の極く僅かを入手するのは途方もなく困難となっている。技術は宇宙征服レベルで発展し、往々にしてそれは、生活を豊かにするには何程のかかわりがあるのであろうかと考えられる浪費的生産のために用いられ、環境破壊を成果とする。利潤のためには、資本は必要とする労働力をその好みそのままに吸い上げるとともに、一方生活のための基本的整備はますます弱化したままに放置し、資本主義的生産としては不採算部門として資本の活動の外におかれ、資本家的採算のらち外での生産に委ねられる。こうして、奇妙ではあるが、当然の結果として一方での発展が一方での破滅となり、一方からは発展の代償が求められ、他方からは破滅の救済が要求されることになる。

資本は社会に一般に必要な生産のために必要な労働時間の減少をはかり、労

働者に自由に処分しうる時間をもたらす代わりに、剰余労働の産出のための必要労働時間の引下げを図る。そして資本の私した剰余労働時間は資本家には自由時間となっても、そのほかには過剰労働時間または過剰時間としてしか転化させない。

過剰労働時間は、労働者の必要労働時間の条件として資本の支配の下に行使させられるものであり、労働者は資本の必要に応じることにより、はじめて自らの生活を保ち得るのである。そしてそれは、資本が不必要と断じた場合には過剰時間すなわち「労働者に固有の自由時間」、失業となる。その上皮肉にもこれらの時間はすべて、労働者が資本主義的生産の労働時間のうちよりもたらしたものである。

労働時間における必要労働時間、剰余労働時間については、それが階級社会の歴史を通じて階級的に存する基礎規定であることが理解できる。しかし剰余労働時間の過剰労働時間への転化、過剰時間の創出については、それはきわめて近い現代のより特徴的な分析課題である。その止揚は資本主義的生産の止揚でもある。

4. 労働時間、自由時間

物質代謝の人間的展開として、人が自分の持つ力を外なる自然に働きかけて自己をより豊かにする物を創ること、自分自身を外に対象化させて自己を拡大してゆくことは、人間のみ特有の自己実現の様式であり、障害を克服しつつ自己を実現する行動こそが自由の行動である。そしてこの自由の行動がまさに労働として措定されているとされる。けれども、「奴隷労働、賦役労働、賃労働というような労働の歴史的諸形態においては、労働はつねに反撻的なものとして、つねに外的強制として現れ、この労働に対立して非労働が『自由、および幸福』として現われる。¹¹⁾」

資本主義的生産における労働＝賃労働が、労働する者にとって、より疎遠な外的なものとなっていることは周知のことである。そこでの労働は以前にも

11) マルクス、『経済学批判要綱』555ページ。

まして強い「のろい」をなしており、労働者の安息と自由と幸福を犠牲にすること著しいものとなっている。労働者は、自らがそこに充てた「労働時間」によって作り出した「自由時間」を自分のものとするにはならない。先にみたように、労働者が「自由時間」を得たというのは、彼がその「労働時間」を失ったときであり、それは安息からの自由を得たことにほかならない。労働者が費した労働時間は、前にみたように必要労働時間と剰余労働時間とに捉えられ、そこでは労働者自らに必要な生活手段を充し、さらに非労働者の生活手段を充し、その上なお剰りある生産を行うのであった。こうして生産力は発展し生産は一層に拡大し来たった。労働の生産力が発展すれば、当然に労働時間を減少し、それだけ労働者に非労働時間を増加させてよい理屈である。理屈通りに事が運こばば、労働者はその時間を自分で自由に処分しうる時間として獲得する。つまり労働時間の短縮が実現され自由時間を得ることになる筈である。しかし事実はその様には実現していない。

生産手段を所有し支配しているのは労働者ではなく、その支配者である資本家たちはただ生活手段の生産のみを、また生活手段の生産を直接間接に目的とする生産手段の生産のみを行うことを事としているのではない。現在の生産機構そのものを維持する手段をも同時に再生産しなければならない。ここでのそれを支える柱は、剰余労働時間の支配であり、拡大である。労働者に真の意味での自由な時間を持たせることは現行の機構の破壊手段を供与することとなる。剰余労働時間は労働者が獲得する自由時間への転化の可能性を含みつつも、現実にはそうはならない。労働の生産力の発展、生産性向上によって得られた可処分時間は資本によって資本制秩序維持に有効に処分せられる。それは労働者にとっての過剰の生産であり、しばしば抑圧の手段となるものである。

たしかに資本は、労働者の労働時間によって生み出された可処分時間を、科学・技術・芸術の発展に充てているのであろう。だが資本主義社会において科学や技術が商品生産に関わることなく、軍事に関わることなく、人間の存在そのものの基本のみを専一の目的とすることは困難であり、芸術すら体制保持の大勢に関わらないでただに人間的であることを求めるのはなかなか困難であ

る。そして何よりも、労働者が生み出したこの可処分時間は、生み出した労働者自身の可処分時間とはならない。そして、折角生み出されたその時間は、労働者の外に大変結構に「社会的」に使われるのであるが、それは資本制秩序的に、科学・技術は、研究者・管理者・職員あるいは専門的職業家の享受すべきものとして、芸術は才能あるタレントのものとして、労働者の上層に階梯的に積み重ねられる。こうして資本の指揮権に近いところから、「労働時間」はより「自由度」の高いものから低いものへと配分され、もっとも大きい社会的必要を充す労働者の労働時間は、減多に減少されることにはならない。しかも、この秩序のなかに暮す人びとは、実際には支配権力への従属度が高く権力の代行者にほかならぬ地位を、より「自由」なる「幸」なるものとして、その階梯を登ることに汲々となる。人びとはここでの解決が秩序を変えるために連帯することにあることに思いを致すことなく、階梯を益々強固にして、縦断のうちに散り散りになって従属する競争に明け暮れることをしている。その矛盾については痛いほど知りながら、この階梯登攀競争をさらにまた後に続く世代に激烈に強要する。受験地獄などというものの出現が、生産力の発展の称えらるべき成果であるなどとは誰一人として思うものはいないであろうが、時間の消費がそのような形で現われているのは事実であるし、それが貴重な青春の浪費となっていることを認める者は少くないであろう。

「社会一般と社会のすべての構成員にとっての必要労働時間以外の多くの自由に処分できる時間（すなわち個々人の、したがってまた社会の生産力を十分に発展させるための余裕）の創造、非労働時間のこうした創造は、資本の立場では、あらゆる先行諸段階と同様に、少数者にとっての非労働時間、自由時間として現れる¹²⁾」創造された自由処分可能時間は社会・大衆のものとなるのではない。先行諸段階と異って「資本が追加するのは、資本が芸術と科学のあらゆる手段を通じて大衆の剰余労働時間を増加させることだ。なぜなら資本の富は直接に剰余労働時間の領有にあるからである¹³⁾」

12) , 13) マルクス『経済学批判要綱』, 655ページ。

労働者が資本に対抗して時間短縮を要求するとき、資本が労働者に与えるのは「余暇時間」である。それを労働者が自由時間として内包するところまで資本が譲歩しているかどうかは疑わしい。「余暇時間」はまた剰余労働時間と無縁でなく、それは労働能率を向上し、より大きい価値増殖へと反映する。だからこの譲歩はしばしば先進資本家たちによって提言されることになる。「余暇時間」が労働者の要求によることもなく与えられ、なおそこで労働者が主体をなすことが可能であろうか。

労働者が身心の健康保持の必要（労働力の再生産）のために獲得しようとする余暇は、自ら創り出した自由時間の部分的買い戻しであって、それはちょうど支払われた賃金を以て、自ら創り出した生産物を今度は自分の生活手段として買い戻さねばならないことに似ている。階級社会における民衆の「余暇時間」は何時でも労働時間に対置して存するのであり、少数者が自由時間に包摂して持っている余暇とは質量を異にしている。労働者の余暇は、資本家が労働者の生活手段を商品として持っているのと同じく資本家の手中にある。労働者は、自分の余暇を、継続勤務する労働時間（資本家にとっては継続する剰余労働）と引き換えに手に入れる。そして、この時間を得る労働者の闘いはきわめて困難である。衣食は忽ちにして生命にかかわり、それを充すための賃金は労資誰の目にも明かであり手にとって見ることもできる。しかし時間は目には見えない。まして、自由な時間の増加が人間の富の真の増加だなどということは。

労働者の「余暇時間」の獲得、労働時間の短縮は、剰余労働時間止揚の出発点である。だがそのためには労働者は「余暇時間」を自由時間への転回の起点として自分のものとしなければならない。今日労働者の余暇は余りに貧しく、貧しい余暇は労働者をますます貧しく再生産する。

5. 労働時間の矛盾の止揚

働く楽しみとともに、労働が苦痛であり仕事は苦しいものとするのは働く大衆の実感であり、衣食の道さえ整えば誰も好き好んで人に雇われて働くことなどしたくないというのが大方の切なる思いである。労働は労働者にとって自己を犠牲にする苦痛として負わされている。労働が苦であり非労働が楽であると

する考え方は労働者大衆の日常現実生活からの所産である。だから大衆はたまたま得た閑暇をごろ寝に過してしまう。そしていう「世の中に寝る程楽はなかりけり、浮世の馬鹿が起きて働く」、などと。あくせく働かねばならぬ日常の我身を皮肉をこめて馬鹿という労働者にとって、労働は我身を犠牲とすることであっても、それが我身を顕現するものとは考えられない。今われわれの労働の苛酷な現実には労働の人間にとっての真実の意味から遥かに遠いところにある。たしかに労働を事としなければならない労働者にとって労働は呪詛である。

だがそれは、階級社会の外的強制に身をさらした労働者が受け取る、労働の歴史的形態の一面であって、もともと人間活動そのものである労働は、人間にそのように苛酷に課せられる宿命をもったものではない。このことに関して、マルクスは次のように述べている。

「なんじ面に汗して労働すべし! とは、エホバがアダムにあたえた呪詛であった。そこでA・スミスは労働を呪詛と考える。『安息』は適当な状態として、『自由』と『幸福』と同一のものとして現れる。個人は『彼の健康、体力活動、熟練、技巧の正常の状態では』労働と安息の止揚との正常な持ち分への欲求をさえもっているということは、A・スミスにはまったく理解されていないように思われる。もちろん労働の程度そのものは、達成されるべき目的と、この目的を達成するために労働によって克服されるべき障害とによって、外部からあたえられたものとして現れる。だがこうした障害の克服はそれ自体が自由の実証であるということ——さらにまた外的諸目的は、たんなる外的自然必然性をはぎとられた外観を受けとり、また個人それ自身がはじめて措定するところの諸目的として措定されるということ——したがって自己実現、主体の対象化、それゆえに真実の自由——この自由の行動がまさに労働である——として措定されるということにも、A・スミスは同様にほとんど気がついていない。¹⁴」

労働はまさに外的障害を克服して自己実現を果す行動であり、主体の対象化

14) マルクス『経済学批判要綱』, 554~555ページ。

それゆえに真実の人間の自由の行動であるのであった。しかし労働が階級社会における歴史的諸形態に現れるときは、労働は非労働の自由、および幸福の対立物として現われることも、その通りであるとする。そしてこの労働と非労働の対立の二重の意味を明らかにする。マルクスは続けていう。

「もちろん彼は次の点では正しい。すなわち奴隷労働、賦役労働、賃労働というような労働の歴史的諸形態においては、労働はつねに反発的なものとしてつねに外的強制労働として現れ、この労働に対立して非労働が『自由、および幸福』として現れるということ。このことは二重にあてはまる、すなわち、《第一には》上記のような対抗的労働についてであり、また《第二には》、これと関連するが、労働が魅力的な労働、個人の自己実現となるための諸条件、主体的ならびに客体的な諸条件がまだつくりだされていない（これらの諸条件を失っている遊牧状態その他の諸状態にくらべてさえも）ような労働についてである。だが労働が魅力的な労働、個人の自己実現となるといっても、……労働がたんなるおどけや、たんなる娯楽となるということをけっして意味するものではない。真に自由な労働、たとえば作曲は、同時にまったく大変な真剣さはげしい努力なのである。¹⁵⁾」

労働が苦痛として現われるのは、それを外から強制する社会的機構があり、それに対応して、労働の機能が自己実現を果すものとはなっていないことにある。外的内的諸条件が整いさえすれば労働は魅力的なものとなりうる。もっとも魅力的という意味は、真に自由な主体的努力を注ぐ楽しさということでありたんに安逸をむさぼるということではない。真に自由な労働というのは作曲家が作曲をするようなきびしい努力の活動を伴うことが例示される。

されば、大衆一般が従事する、通常のそして人間の生命保持の基本にかかわる物質的生産において、真に自由な労働の実現は可能なのであろうか。マルクスはその可能の条件を次のように示す。

「物質的生産の労働がこうした性格を受けとることができるのは、ただ

15) マルクス『経済学批判要綱』, 555ページ。

1) 労働の社会的性格が措定されているということ, 2) 労働が科学的性格をもち, 同時に一般的労働であるということ, 言いかえるならば, 労働が一定のかたち¹⁶⁾に調教された自然力としての人間の緊張ではなくて, 主体——生産過程でたんなる自然的・自然発生的形態で現れるのではなくて, いっさいの自然力を規制する活動として現れるところの主体——としての人間の努力であることによってだけである。いずれにしてもA・スミスは, 資本の奴隷のことだけを考えている。たとえば中世のなかば芸術家的な労働者でさえも, 彼の定義のなかに位置づけることはできない。]

真に自由な労働は, まず, 労働が資本の私的支配から脱すること, 資本の奴隷となっている歴史的形態を克服し, 社会的必要のためのものたることが果され, それとともに, 主体としての機能を回復すること, すなわち, 労働は, 生産過程のなかに自然過程としての機械あるいは部品としての活動形態で在るのではなく, 主体たる人間として自然力を支配規制する, そのような人間活動としてあるところに現出する。

労働は人間のため人間が行う活動である。そこで問われなければならないのは労働の社会性と, 労働の主体性である。労働の社会的性格が措定され, 人間の主体的活動の下に自然過程をおくとき, われわれは真に自由な労働を得ることができるのだとする。

おわりに

近年週休二日制の問題や, 余暇についての論議がさかんであって, ときどきそのことをどう考えるべきかが問題になる。そこでいや応なしにその答をさぐらねばならないとき, 第一に感じることは, われわれの国では, そもそも問題のとらえ方がさかさまになっているのではないかということである。労使も行政も, 労働問題として, 労働時間のことはおいて休日や余暇をまず取り上げるというのはどういうことであろうか。労働問題として取り上げられるのは労働しない時間の方ではなく労働する時間の方であり, 労働時間の体系的把握の間

16) マルクス『経済学批判要綱』, 555ページ。

題ではないか。と、いうことである。週労働（労働週）を5日制にするか、6日制にするか、1日の労働時間を8時間にするか7時間にするか労働時間についての検討が行われる前に、休日のことのみどのようにするかを決めようとするのは、発想が常識とは逆であるように思える。さらに余暇については、それをレジャーと呼ぶのであるが、そのとらえ方は各人各様で共通の概念は殆んど構成されていない。より一般にはレジャー＝娯楽ととらえられているのである。

このようなわけであるから、労働時間の体系のなかで、労働時間に注視しそれに関わって明らかにさるべき休暇や定年の問題も、労働時間からは切り離し、全くばらばらに断片的に取り扱われてしまうことになってしまっている。人間が生涯を健康に甲斐ある生き方をするのに、時間の獲得活用は如何にあるべきかの体系が全く考えられていないように思えるのは第二の感じである。

人びとの生き方として、共に如何に楽しく生きるかが基本志向となりえていないわが国では、労働時間について、さまざまな角度から研究し、それが世間に広く話し合われるようになることが必要である。殊に労働者にとって、労働時間短縮と日本に独特の定年制にとり組むことは現下の重要な課題であると考ええる。

労働時間についてその実態を追跡し、それを体系的に整理してとらえることをしたいというのが、われわれの願いであるが、まずはそのために、労働時間の経済仮説についてみておくこととした。日常接している領域とはやや遠く誤解や曲解をしていることさえも気づき得ない。大方の御叱正、御教導を得たい。

（1977年、8月30日）